D 部会

少子高齢化から
夢のあるまちづくりを考える
～30 年後の目指す姿を見据えて～

D 部会

宇佐見将太 (リーダー)/ 臼田好希 / 川嶋涼子 / 山田武夫

少子高齢化から夢のあるまちづくりを考える
～３０年後の目指す姿を見据えて～

私達が取り組む課題

30 年後地域が目指す姿を共有できていない。

Ⅰ　課題の背景と現状

人口も減り、経済が衰退する中で、右肩上がりという現状の価値観でしか、地域の将来を考えられていないのではないかと考えました。こういったテーマのもと、私達の部会は、長いスパンを見据えた事業を提案したいと議論をはじめました。

【アプローチする課題を絞り込むまで】

まず、このテーマにおける具体的な課題は何か、部会内でワークショップを行いました。そこで出たのが以下の３つの課題です。

１．働く場（若者）不足と医療需要のバランスをとる

将来を考えると、独居老人の増加、魅力的な高齢者施設の不足がある一方で、そういった高齢者を支える若者の市外流出、減少があります。そのミスマッチのバランスをとるために、若者には働く場を、高齢者には、安心して暮らせる体制づくりが課題となります。

２．経済、交通、公共サービスをつなげる

人口減少となると、これまで通りには経済活動も成り立たなくなります。公共サービスも税収が減少しニーズが多様化する中で取り組まなければいけません。将来を見据えると、経済活動と公共サービス、そしてそれをつなげる公共交通のシステムがうまくつながり合ったまちづくりが必要です。

３．若者と老人が定着したいと思う魅力づくり（過疎対策）

世代間交流の減少、若者が魅力と感じる場所がない、若者に地域の魅力を感じ一度外に出てもまた戻ってきたい地域になることが必要です。

【その課題を設定した理由と根拠】

１．行政担当課からの資料提供でわかったこと

上記の仮説のもと、下記の資料を提供いただき、数字的に課題を検討しました。

・関市の人口減少予想

・税収の低下
・高齢化率、高齢人口の変化
・介護保険料の市の負担の増加予測
・関市第４次総合計画
・上之保地域振興計画

上記から、現状の上之保の高齢化率が38.9。30年後には、関市全体の高齢化率が38.9%なることが分かりました。

これらの数字を改めて見て、市の施策を考えてみると、負担増、サービス、公共施設の廃止など、ネガティブな施策が多く並びます。これは致し方ないことなのですが、少子化、高齢化中でも住みたいと思える「夢のあるまちづくり」を目指し、それらを逆手に取った施策がもっと必要なのではないでしょうか。

また、一方で、市民にとってこれまでの延長線ではない30年後の関市を想像して実感することは難しいと考えます。さまざまな計画を見ても統計として数字は出ているものの、それが反映された計画となっているとは言い難い面もあります。

私達は、「少子高齢化を解決する」のではなく、「少子高齢化と向き合う」ことが必要だと改めて考えました。「日本一幸せな、少子高齢化のまち」にそれが私達の合言葉になりました。

２.「幸せとは何か」に議論から見えて来たもの

上記を踏まえ、私達は、30年後到来する関市の未来を見て、そこで「幸せに暮らす」とはどういったことなのかを考えてみました。一生健康で暮らせること、やりたいことができることなどなど、メンバーそれぞれ、多種多様な意見が出ました。当然ながら、幸せは人それぞれ違うのです。議論がまとまることはありませんでした。しかし、この議論を通して気がついたことは、こういった議論をすること自体が自分自身のこと、家族のこと、地域のことを考える、とてもいい機会になるということです。普段幸せとは何かを考える機会はありません。それこそが今、関市に欠けている事ではないかと考えました。

Ⅱ　課題の発生要因の考察

私たちは、なぜ「人口も減り、経済が衰退する中で、右肩上がりが良いという現状の価値観でしか、地域の将来の計画が考えられていない。30 年後地域が目指す姿を誰も共有できていない」という課題が起こったのか、その要因を議論し、大きく２つの要因があると考えました。

１．現状から 30 年後を実感できる機会がない

今の生活で精一杯で考える時間がない、これまでの成功体験から抜けられない等、現状を直視し、30 年後を知る機会がないことが要因の一つだと考えました。

２．「幸せ」とは何かが分からない

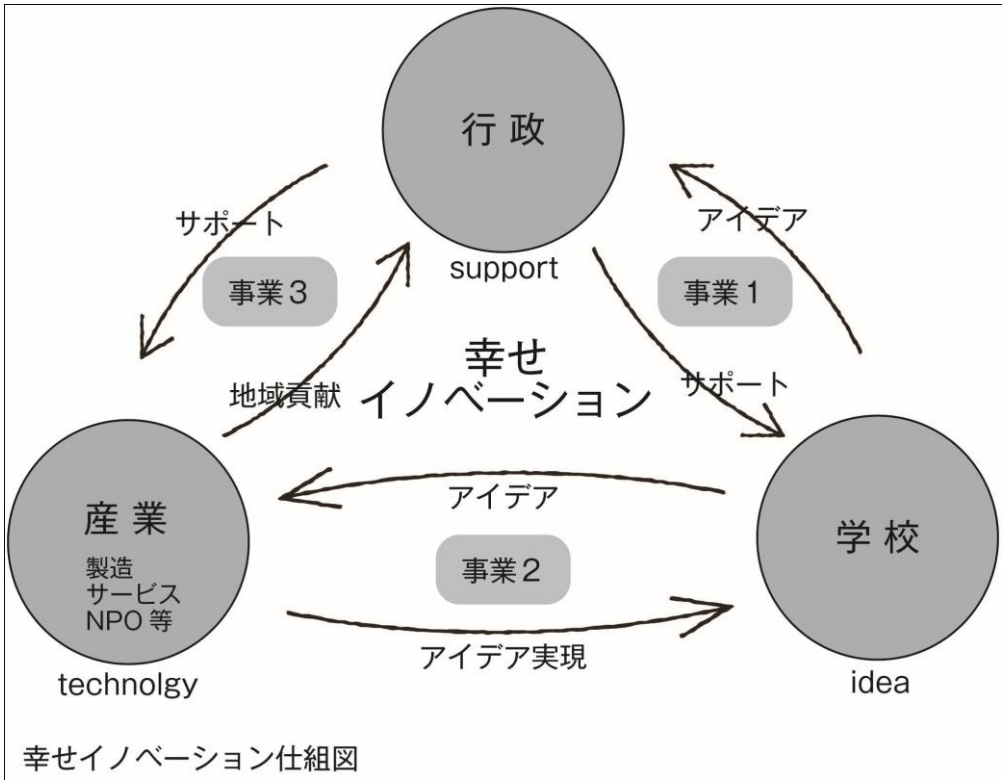
価値観が多様化する中で、どうなったら幸せなのか理解できている人が少ないのではないでしょうか。さらに、人口が減った中での幸せの実例が少ないため、30 年後どうなっていると市民が幸せになるのか定義しにくくなっています。

Ⅲ　課題の解決方法（事業の提案）

提案事業　幸せイノベーション事業

私たちの提案は、30 年後を見据えた長いスパンの取り組みになります。誰も経験したことのない少子高齢化の人口減少社会においては、地域を丸ごと巻き込んだ仕組みをつくることが必要だと考えます。

そこで私たちは、産官学（産業、行政、学校）が一体となって 30 年後の幸せを取組む３つの「幸せイノベーション事業」を提案します。



幸せイノベーション仕組図

提案1 幸せ創造授業～みんながアイデアマン～

＜事業概要＞

子どもの頃から人口減少時代の幸せについて考えることを定期的に行うことが大切ではないでしょうか。

小中学校で、人口が減って行く現状を教え、その後、その世界で「自分が幸せに暮らすために」ついて考える時間をとります。自分のこと、家族のこと、地域のことの視点から考えます。この授業は、1 年に 1 回行います。授業終了後には、この話し合った内容に関して家族で話し合いの時間を設けるよう働きかけます。

義務教育が最後となる中学校 3 年生では、これまで学んで、考えてきた事をふまえて、関市が人口減少時代に幸せに暮らせるようになるための提案を行います（提案２：幸せ実現企業へつなげる）。この提案は、地域が幸せになる方法、少子高齢化を豊かにするモノ、場所、サービスなどを考えます。

この事業では、地域の未来の幸せを考える子どもたちを養うことを目指します。

＜対象者＞

関市内の小学生、中学生

＜想定される実施主体＞

各学校もしくは、PTA が主体となって実施

＜実施方法＞

学校の授業、もしくは PTA の事業の中で、年に 1 回、学び、話し合いを行います。

①関市の現状と未来を知ってもらう授業を行う
　　講師は、総合計画や統計を担当する企画政策課にお願いする
②授業を受けて、あなたにとっての幸せとは何かを考える
③家に帰り、まちの未来について家族で共有するよう働きかけをする

提案2　幸せ実現企業～子どもたちのアイデアを現実に～

＜事業概要＞

提案 1 の中学校 3 年生が提案を含めた市内小中高生のアイデアを、関市の企業が本気で実現する取り組みです。小中高生のアイデアと企業をマッチングするアイデアコンテストを実施します。

現在、子どもたちが地域へまちづくりの提案をしている学校もありますが、それが提案に終わり、実現にいたることはほとんどありません。どれか一つでも、地域の大人達が本気になって取り組んでくれるのを見れば大人たちへの信頼は高まり、子どもたちは希望を抱くのではないでしょうか。

また企業にとっては、子どもの柔軟な発想から、これまで想像しなかったヒット作が生まれるかもしれません。子どものアイデアを実現させる技術を持ち得ることを、地域へ、市場へ PR することもできると考えます。

＜対象者＞

市内の企業、企業団体
市内の小中高生

＜想定される実施主体＞

商工課、商工会議所、ビジネスプラス展 in SEKI 実行委員会

＜実施方法＞

「ビジネスアイデアコンテスト」を実施する
・できるだけ多くの企業の参加を募る
・市内の小中高生のアイデアを募る
（提案１で出た中学３年生のアイデアもこのコンテストに参加）

※今年度初めて開催した「ビジネスプラス展 in SEKI」の場を活かすことは大変有効であると考えます。

提案3　幸せ応援行政～夢を実現する企業をサポート～

＜事業概要＞

上記、提案 1、提案 2 を取り組むうえで、幸せに関する取り組みを行政が金銭的、人的にサポートします。

■企業に対して

事業 2 の幸せ実現企業の事業を実施。アイデアを実現する過程で必要な費用を補助します。

例）　・アイデア試作品を作る費用補助、場の提供
　　・夢を実現する事業について広報等で大々的に PR
　　・各種団体のコーディネート

＜対象者＞

企業

＜想定される実施主体＞

商工課

～　まとめ　～

これからの私たちは経験したことのない人口減少社会へと足を踏み入れていきます。それは経験したことないだけに、なかなか実感が湧きません。分からないからこそ将来を示す計画が大切です。まずは、みんなでこの事実を議論することから、目指すべき将来への共通認識が生まれるのだと確信しています。

また、関市には素晴らしい技術を持ったものづくりの企業がたくさんあります。その技術こそ「少子高齢化に向き合って暮らしていくため」に役立てるのではないでしょうか。

子どもも大人も、企業も行政もみんなの力を合わせて 30 年後の社会を幸せに過ごす為の幸せイノベーションを実現させましょう。